

日英語の発想の違い

——ことばを尽くす英語と言わずに済ます日本語——

How English and Japanese are Different

——English Says Everything and Japanese Says Nothing——

森 光 有 子

はじめに

英語と日本語というような異なる二つの言語を比較検討する際、二つのアプローチの仕方がある。一つは、問題の二つの言語に共通する点は何かを見ることであり、そしてもう一つはそれらの相違点を明らかにしていくことである。いくら言語が異なっても、同じ人間である以上、共通点は多々見出せる。例えば、人間が共通に持つ身体経験に基づいて、「上は良い・下は悪い」というイメージを持ち、それを言語表現化している例は多くの言語に見られる。

しかし、サピアーウォーフの仮説が示すように、「ある言語において記号化されている概念的区別は、他のどの言語にも見られない」のである。¹⁾そしてウォーフが述べたように、「我々は自分の母語によって定められた線に沿って自然界を切り分けるのである。様々な事象からなる世界から我々が取り出す範疇や類型は、それらがあらゆる観察者の目の前にあるからといって世界の中に見い出すことはできないのである。(中略)我々は自分なりに自然界を切り分け、それを体系付けて概念化し、意義があると見なすのである。これは主に、我々の間でこのように自然界を体系付けるということと同意が成り立っているからである。この同意は我々の言語共同体全体に行き渡っており、我々の言語様式の中にきちんと定められて

いるものである。』²⁾

ことばにはそれぞれの文化が反映されている。ことばを見ればそのことばを使う人々のものの見方や捉え方が見えてくる。例えば、エスキモー語には「降っている雪」「地上の雪」「氷のように硬い雪」「半解けの雪」等々に相当する語があり、これらのさまざまな雪一つ一つに独立した語が存在しているのである。また、アラビア語は馬やらくだを表すのに、その大きさ、品種、役割、状態等に応じて、別個の語を持つ。オーストラリア原住民のことばであるピントゥピ語には、穴を表す数々の語がある。yarla (物体の穴)、pirti (地面の穴)、pirnki (岩棚のつくった穴)、kartalpa (地面の小さな穴)、yulpilpa (蟻の住む浅い穴)、mutara (槍の特別な穴)、nyarrkalpa (小動物の巣穴)、pulpa (兎の巣穴)、makarnpa (オオトカゲの巣穴)、katarta (オオトカゲが冬眠後、地表を割った時にできた穴) 等のように、さまざまな穴を表すのに別個の語を持っているのである。³⁾ナヴァホ語には植物や儀式を表す語が多く、日本語には雨を表す語が豊富にある。また、単に語の問題ではなく人称代名詞のシステムの問題であるが、日本語では人称代名詞と言われている「わたし」や「あなた」等よりもむしろ他のさまざまな親族名称や地位名称を使うようになっている。⁴⁾

同じもの、同じことが違った文化では違った形で言語表現化される。また、何を言い何を言わないのかも文化である。ある現象を言語表現化するのか、またどの程度まで念入りに言語表現化するかは、どれだけその現象がそれぞれの文化に密接に関わっている大切な側面であるのかということと関係している。

このように、我々は人間としての共通項を持ち、それを表す言語表現を持つ一方、それぞれの文化を反映する表現を有する。本稿では、後者の立場から、そして言語を日本語と英語に絞って、考えていくことにする。まず1で、日本語の発想がいかなるものであるかを見、次に2で、英語の発想を見る。そして3で両言語間に見られる発想の違いを明らかにし、またその原因を探る。

1. 日本語の発想

ここでは、日本語の発想にはどのような特徴があるかを見るために、具体的な例を挙げながら、いくつかの視点から考えていきたい。

1.1 ビッグ・ワードが好きな日本語

日本人は空疎なビッグ・ワードを好む傾向がある。一見、格好良いのだが、中身がなく、聞き手・読み手である情報の受け手は結局何が意図されているのか分からず、人によって理解にばらつきが生じるという場合も多い。次の例を見てみよう。これは教育基本法の見直しを提言した中央教育審議会による中間報告案についての記事の一部である。⁵⁾

- (1) 基本法の見直しでは、新たに盛り込む基本的理念として①個人の能力の伸長、創造性の涵養、個人の自己実現、努力や向上心②「新たな公共」の創造に貢献する意識、公共心、道徳心、倫理観、自律心、規範意識③国際性と、日本人としてのアイデンティティー(伝統、文化の尊重、郷土や国を愛する心)④……

いずれの語を取ってみても非常に抽象的で、また意味が曖昧である。教育の基本理念としてこれらを提示されても、結局、何をすればよいのか分からず、なかなか実態に変化が起らないのが実情であろう。「教育」という最も重要な部分で何をすればよいのか分からない、という提示の仕方のできるのが日本語である。次の例(2)は、大きなことばを使って事業をしようとした結果、問題が生じてしまった例である。⁶⁾

- (2) 「中部空港は **PFI** でやる」。97年11月、自民党の山崎拓政調会長(当時)は、…こう告げた。…「**PFI** の先導的プロジェクト」とされた。

PFI は…90年代に英国で始まったが、中部空港の場合は「**PFI**

がどんなものか分からないまま、広く民間主導という意味で使った」と、当時の運輸次官、黒野匡彦・新東京国際空港公団総裁も認める代物だった。

しかし、このあいまいさが公共事業の突然変異を生む。…「何をやっても結構」と、黒野氏は平野社長に言った。……

この例では、ことばを使った本人がそのことばの意味を理解できないまま、事業を動かしている。「PFI（プライベート・ファイナンス・イニシアティブ）でやる」というだけでは、結局何をすべきか、何が意図されているのか曖昧である。発言者自身がことばの中身を理解できず、「広く民間主導という意味で使」い、「何をやっても結構」と言えば、聞き手は当然「PFI」の何たるかを解釈できない。しかし、発話者も聞き手も理解できないまま事を進めることができるというやり方は、日本では残念ながら通用するのである。

企業等でスローガンとして掲げられることばも、「和」「自由」「共生」「礼儀」「信用」「誠意」「創意」「熱意」等が典型的である。⁷⁾これらのいずれをスローガンとして掲げられても、確かにことばは立派であるが、では一体何をどうすればよいのかという具体的な方向性が見えず、結果的に企業の人々の間に統一的行動は生まれにくい。

教育の基本理念にしても企業のスローガンにしても、解釈およびその結果の行動は聞き手あるいは読み手に任せられており、提示者側は何の責任も負っていないように見える。受信者側にとっては何を目標とすればよいのか目指すものが明らかでなく、結局、ビッグ・ワードを多く含んだものは情報としての機能を果たさず、何も伝えていないのに等しいのである。

1.2 「極」のことばで多くを表す日本語

まるで中間段階を表す語を持たない言語かのように、日本語では「極」のことばが多用される。「暖かい」ところを「暑い」と言い、「涼しい」ではなく「寒い」を用い、「熱い」で「温かい」までをカバーする。気象予報士でさえ「涼しい夏」ではなく「冷夏」と言い、涼しい夏は多くの人に

とって「寒い」のである。

そもそも日本文化には、正しいのか間違っているのか、○か×かですべてを判断しようとする傾向があるように思われるが、このような二値的な考え方が日常表現に影響を与えていると考えられる。

次の例は、二値的考え方が現れるのは段階を表す形容詞だけには限らないことを示してくれる。

- (3) a. 一度、遊びに来てください。
b. また遊びに行きましょう。

例 (3 a), (3 b) の下線部「遊び」が問題の箇所である。このような表現は、日常のさまざまな場面でさまざまな人によって使われる。実際に遊びに行くわけでもないのに、別れ際に「また遊びに行きましょう」と、決まり文句のように言う。引越しをすれば、「遊びに来てね」と誘う。「仕事」と「遊び」を両極に置いて、ある行為が「仕事」でなければ、それは「遊び」であるという捉え方をしている。

この感覚を英語にも持ち込もうとすると、明らかに問題が生じる。学生が日常の出来事を英語で表現しようとする時、日本語の発想の「遊びに行った」をそのまま英語に置き換えてしまうのが常である。学生にとっては、勉強をすること、本を読むこと、アルバイトをすること、就職活動に励むこと以外の多くの行為は「遊び」と位置づけられているようである。そして彼(女)たちは「誰が何をしたのか」「それはいつ、どこでの出来事なのか」「またなぜその出来事が起こったのか」等、内容に言及せず、ただ「遊びに行った」という外枠だけを述べるのがほとんどである。枠の内側に触れず、結局何の情報も提供しない、意味をなさない英文を発することになっているのである。

以上のように、日本語では、中間段階を指す語を持つにもかかわらず、その代わりに「極」を指す語を使用したり、またさまざまな行動を表す別個の語を使用しなくても、「仕事」の対極にある「遊び」で「仕事」以外のすべての行為をカバーすることができる。さらに、その「遊び」の具体

の内容には一切触れずに文が成立するのが日本語なのである。

1.3 文法が物語る日本語

日本人が英語を学ぶ際に苦手とされる項目として、よく冠詞や前置詞が挙げられる。その一つの理由として、日本語には冠詞や前置詞はないからということが言えよう。しかし、実際には、日本語の名詞に単数形・複数形の区別がないことも、接続詞や動詞の使い方等も、英語の習得を難しくすることに関係しているように思われる。

日本人にとって、一見、文を複雑そうに見せている英語の文法項目は、実は、それが一つしかないのか、それとも複数個あるのか、またそれが特定のものなのか不特定のものなのかを教えてくれる。あるいは、語句や文同士の関係や、語句や文の全体の中での位置づけを明確に、論理的に示してくれているのである。

これらの文法項目が存在しない、あるいは存在するにも関わらずあまり使用しないというのが日本語である。例えば、日本語は接続詞に重きを置いていないように見える。語句や文が全体の中でどのような関係にあり、結局何を伝えようとしているのかを明示する必要はないという考えがあるようである。確かに、話し手や書き手という情報の発信者が言いたいことのすべてを言うのはよくないと教える風潮がかつてあった。一方、すべてが言われていないものの行間を読めることが聞き手・読み手の必要不可欠な能力で、行間を読める人が優秀な人なのである。このように、語句や文を論理的に繋いでくれる接続詞を重要と考えない日本語の文は、その解釈を受信者に任せてしまっており、文意は曖昧になる危険性をはらんでいる。

また、日本語には自動詞の表現が極めて多い。重要な決定事項でさえ、その責任の所在を明らかにせず、

(4) その件は前回の会議で決定した

と共同で責任を取ろうとする。「〇〇（人あるいは機関）がその件を決定

した」と他動詞的表現を取り、決定者を明示しようとはしないのである。

次の例（5）も、自動詞的表現の典型例である。⁸⁾

- （5）国内最悪のダイオキシン汚染を引き起こした大阪府能勢町のごみ焼却施設・豊能郡美化センター（焼却炉）で働いた従業員 6 人が、焼却炉メーカーの三井造船などに健康被害の責任を問い、総額 5 億 3 千万円の損害賠償を求めた訴訟の和解が、大阪地裁で成立する見通しとなった。（下線は筆者）

下線部の「和解が、大阪地裁で成立する」の箇所が問題の自動詞的表現であるが、この例はそれ以外にも、日本語に典型的な特徴を提示してくれる。この文の主語は「和解」であるが、その主語の修飾部「国内最悪の…訴訟の」はすべて主語の前に置かれるのである。すなわち、文を読み始めてから主語が出てくるまでが非常に長く、また複雑で、何度か読み返さなければ正確に理解できないであろう。さらに、この文が肯定であるか否定であるかは、最後まで読んでではじめて分かるのである。自動詞的表現で、文が肯定か否定かは最後まで分からず、また名詞の修飾部が長く複雑で、場合によっては途中で文の構造が分からなくなり、何度か読み返さなければ正確に文意を把握することが難しい。これらはすべて日本語の特徴であり、例（5）のような文には日常的に頻繁にお目にかかるのである。次の例（6）

- （6）都市ガス大手 4 社が各地の大規模施設などを対象にガスの配管を調査した結果、ガスが供給されているのに、配管図に記載されていない管が 93 カ所にのぼることが、6 日わかった

も同様の例である。⁹⁾この例からは、「ガスが供給されているのに、配管図に記載されていない管が 93 カ所にのぼること」を明らかにしたのは「都市ガス大手 4 社」なのか、あるいは 4 社の調査に基づいて誰か別の人が明らかにしたのか不明である。そして、誰か、あるいはどこか機関が何か

を明らかにするのではなく、何かは「自然にわかる」ものだという自動詞的発想が感じ取れる。

新学期を迎えた子どもに親が

(7) 友だちはできた

と尋ねる表現も自動詞的表現であり、友だちはこちらから働きかけなくても「自然にできる」ものだという発想に基づいている。積極的あるいは能動的に働きかけ、自分の力で何かを「する」—例(7)の場合には、「友だちを作る」—のではなく、誰か(何か)の力で自然に「なる」という、極めて受身的な考え方である。

日本語は主語を言わずに済むことも多い言語であるが、これは行動の主体をはっきりさせないということを意味する。すなわち、責任の所在をはっきりさせずに済むということに等しく、このような言語は非常に曖昧な社会システムの中でしか通用しないように思われる。

日本語には、主語に加えて、誰がどうなのかをはっきりさせない表現にってしまう部分がある。例えば、イギリスのダイアナ元皇太子妃死去の際、時の首相、橋本龍太郎氏は当時のダイアナ妃の英国王室での「位置づけ」を気にしながら、

(8) お悔やみ申し上げたい

と述べた。¹⁰⁾他国の代表者が、「悲しんでいる」「心からお悔やみ申し上げます」等と、はっきりしたことばで態度を表していたのに対し、「○○たい」というのは悲しい。しかし、この「(お悔やみ/お詫び/お喜び/お祝い等)申し上げたい」あるいは「申し上げたいと思います」という型の言い方は、日常的に多くの人が使っている表現である。「○○したい」と希望を述べるだけの表現、さらにそれに「○○と思います」と垣根表現まで付け加えた言い方は、結局、発話者の真意をぼかしてしまう。そして発話者はこの表現を使うことによって、自分の態度を明確に示さずに済むのであ

る。

以上1では、3つの側面から日本語はどのような発想に基づいて成り立っているのかを見た。立派なことばを並べはするが何の情報も伝えていないに等しかったり、一つのことばで広範囲のさまざまな現象を表したり、構造が論理的でなく、また重要なことや行為主の意図も明確にせず済んだり、極めて曖昧な日本語の側面が示された。それに対して英語はどのような特徴を持つのだろうか。2で見ていくことにする。

2. 英語の発想

2では、英語の発想はどのようなものなのかをいくつかの例を示しながら考えていきたい。

2.1 ビッグ・ワードを避ける英語

英語には、一般的に、抽象的語彙やビッグ・ワードを避けようとする傾向がある。人々の理解と、その結果の行動にばらつきが生じないよう、必要な情報を具体的に明示する場合が多い。

アップル社のスローガン、

(9) Think different

は有名であろう。やさしい語、明確な動詞で社員の行動に直接働きかけることばである。方向性のはっきりした表現で、人々の解釈は一致し、その結果の行動にもばらつきが生じにくい。

広告のことばというのも、一種のスローガンと考えられる。次の例(10)–(13)は、いずれもオーストラリアで見つけたたばこの広告である。

(10) SMOKING KILLS. In Australia, tobacco smoking causes more

illness and early death than using any other drug. Tobacco smoking causes more than four times the number of deaths caused by car accidents.

- (11) **SMOKING CAUSES HEART DISEASE.** Tobacco smoking is a major cause of heart disease. It can cause blockages in the body's arteries. These blockages can lead to chest pain and heart attacks. Heart attack is the most common cause of death in Australia. Smokers run a far greater risk of having a heart attack than people who don't smoke.
- (12) **SMOKING WHEN PREGNANT HARMS YOUR BABY.** Poisons in tobacco smoke reach your baby through the bloodstream. If you smoke when you are pregnant, you greatly increase the chance of having a baby of low birth-weight. Smoking may lead to serious complications which could harm your baby.
- (13) **YOUR SMOKING CAN HARM OTHERS.** Tobacco smoke causes cancer and poisons people. People who breathe in your tobacco smoke can be seriously harmed. Your smoking can increase their risk of lung cancer and heart disease. Children who breathe your smoke may suffer asthma attacks and chest illnesses.

広告というと、商品売るためのものと思ってしまうが、しかしそうとは限らない。これらのたばこ広告はいずれも、たばこがいかに健康に悪影響を及ぼすかを主張している。一見してわかるとおり、これらは喫煙に少し注意を促すだけでなく、長い説明である。しかし、いずれも誰が読んでもわかるやさしいことばで、具体的に説明されている。

例(10)では、喫煙を他の薬物や交通事故と比較して、それらよりどの位死亡者が多いのかを具体的な数字で表している。(11)では、喫煙者はそうでない人と比べてどのような病気になりやすいのかを、具体的な病名や死因と関連づけて説明している。例(12)では、喫煙による害がどのようにして胎児に届き、そしてどのような子が誕生することになるのかを具体的に示し、また(13)では、喫煙が周囲の人にどのような悪影響を及ぼすのかを、病名等を具体的に挙げて説明している。いずれも科学的証拠、データに基づいた具体的な情報であり、誰もが納得しやすい。

さらに、一本のタバコには何がどの程度含有されているかを具体的な数値で示し、それがどのような身体の状態を引き起こすか等を明示しているものもある。そして、いずれの広告の場合にも、最後により情報を必要とする人のために電話番号が記されている。

このように、具体的ことば、具体的な数値で情報を明示すれば、人によって解釈が異なる可能性は低く、誰も喫煙に魅力を感じないであろう。わかりやすいことばで内容の濃い情報を発信し、受信者の行動に直接働きかけるのが英語のやり方である。

2.2 枠の中身を語る英語

外枠にのみ触れ、中身を表さない日本語と異なり、英語は内容に言及する。例えば、日本人が「これはいい本だよ」とだけ言って、本を薦めたりする場合に、

- (14) a. This book is good to think about your future,
- b. This novel is good for a laugh,

等と言って、本がどういう側面を持つかに具体的に言及する。次の例(15)

- (15) This knife is just good for slicing a loaf,

も、ナイフがどういう点で良いのか、何に向いているのかをはっきりさせ

ている。

再び学生の例になるが、趣味を尋ねられた日本人学生の多くは、「スポーツが好きです」「音楽が好きです」と外枠だけに触れてすべてを言った気になっている。これをそのまま英語の表現に置き換えて、“I like sports,” “I like music” としてしまうと、間違っていないのだが、物足りない表現になってしまう。普通英語では、

- (16) a. I like to play tennis,
- b. I like to watch a baseball game on TV,
- c. I like to play the piano,
- d. I like to play Chopin on the piano,
- e. I enjoy listening to jazz,

のように、特定のスポーツ種目や音楽のジャンルに触れ、またスポーツをするのか見るのか、音楽を演奏するのか聴くのかも示す。行為について、“play,” “watch,” “listen” と別個の動詞を使用し、単に「好き」ですべてをカバーするようなことはしない。

以上のように、英語では、ものの外枠についての言及だけに留まらず、その中身に具体的に触れることが自然である。

2.3 文法が物語る英語

英語には基本的語彙項目として、5 W 1 H-WHO, WHAT, WHEN, WHERE, WHY, HOW- がある。そして、この5 W 1 H を用い、誰が、何を、いつ、どこで、どのようにしたのか、またそれは何故なのか、ということを具体的に明示する。まず、主語を言わないことの多い日本語と異なり、英語の場合は通常、主語は不可欠である。主語を明示し、「誰が」あるいは「何が」という行動の主体、行為主をはっきり示すことで、責任の所在を明らかにする。

また、他動詞構文を中心を持つ英語は、行為主が何かを「する」ということを大切にす。友人も「自然にできる」のではなく、自ら積極的に、

あるいは能動的に働きかけて「作る」ものなのである。

ここでいくつか例を見てみよう。¹¹⁾

(17) On September 11, an act of hate changed all our lives.

(18) The military code we live by states that . . .

(19) The head of the World Health Organization warned health specialists Monday of a possible resurgence of the deadly SARS virus later this year and urged countries to boost monitoring to contain the threat.

“None of us can predict what will happen later this year. Will SARS come back or not?” director general Lee Jong-wook told a five-day WHO regional committee meeting in Manila.

例 (17)–(19) の文のいずれを見ても、主語が明示されている。主語は人であったり物であったり行為であったりとさまざまであるが、そこに責任があることを示している。また、例 (19) の “None of us . . .” が示すように、英語は否定辞を文頭に置くことができる。文の初めに否定辞と動詞を配置することにより、発話者あるいは主語は、はじめに自分の態度、発言内容が肯定か否定かの立場を明確に示すことができる。さらに、冠詞や単数形・複数形といった文法項目も、文意を明確にする機能を果たしている。

また、次の例 (20)–(22) にも示されるように、¹²⁾

(20) Kakadu National Park, located just east of Darwin along the northern coast of Australia, enjoys a rare distinction,

(21) Charles Darwin, who formulated the theory of evolution, was . . . ,

- (22) Sweeney, the mother of two small children, calmly told Woodward how a group of passengers . . . ,

名詞の修飾部は、問題の名詞の前後に分けて置かれる。特に、その名詞を説明する長い修飾部は、いろいろな形を取って名詞の後に置かれる。これは文の構造を分かりやすくするのに役立つ。

このような英語の文法面での特徴は、発話者や主語によって示される行為主が最初に自分の立場を明らかにし、論理的に、また誤解が生じないように話を展開していくのに、英語が適していることを示している。

以上 2 では、英語がどのような発想に基づいた言語であるのかを 3 つの側面から観察した。その結果、具体的ことばを用い、また具体的数値を示し、方向性を明示することによって、情報の受け手の理解と行動を促したり、また行為の主体、責任の所在、発話者や行為主の立場等を明らかにし、構造も論理的である等、英語の特徴を示すことができた。次の 3 では、英語と日本語の発想の違いをまとめてみる。

3. 日本語と英語：発想の違いとその原因

1 で日本語の発想について、2 で英語の発想について考えてきた。3 では、日本語、英語、それぞれの特徴をまとめる形で比較する。そして、何故そのような違いが存在するのか、その原因に触れる。

3.1 発想の比較

これまで述べてきたさまざまな相違点を改めて比較するために、次の例 (23)、(24) を見てみよう。¹³⁾

- (23) a. 来年 2 月に任期満了となる大阪府の太田房江知事 (52) は 8 日、大阪市北区の大阪国際会議場で記者会見し、「大阪再生への歩みを着実にすることが私の責務だ」として知事選への立候

補を表明した。……

太田氏は就任当初から「大阪再生」を最大のテーマに掲げており、この日の会見でも「やり残したことが多く、道半ば」として、2期目には、産業再生、安全なまちづくり、健康福祉社会の実現、行財政改革などに取り組むとした。

- b. **Osaka Gov. Fusae Ota announced Monday her intention to run for the next prefectural gubernatorial election.**

Ota, whose term will end on Feb. 5, said she was only halfway toward her goal of revitalizing the prefecture, and that her task was to bring the prefecture back on the road to a steady renewal.

……

She pledged to revitalize local industries and support child care, and will announce a concrete policy with numerical targets by the end of the year.

- (24) a. ……黒磯市は大規模火災対策本部を設置し、半径1キロ以内の1708世帯、5032人に避難を指示した。

- b. **Firefighters ordered the evacuation of 5,032 residents in 1,708 homes after a fire broke out at the Bridgestone Corp. tire plant in Kuroiso, Tochigi Prefecture, at about noon Monday.**

この2例は、同じ出来事についての記事を日本語の新聞と英字新聞とで比較したものである。違いはさまざまあるが、ここでは主な相違点のみを挙げてみよう。

まず、(23)の例は、太田氏が次期知事選に立候補を表明したということを読者のために記事である。英語の記事(23b)は明らかにそれを示している。ところが日本語の記事(23a)では、まず主語の「太田房江知事」の前にそれを修飾する部分があり、肝心の「立候補を表明した」の前

にまた長い語句が続く。主語の態度を明示する、一番肝心な部分「立候補を表明した」は、一番後回しである。つまり、最後まで読まないと言っていることは伝わらない構造である。長く、またいろいろな情報があって、読んでいるうちに、これは一体何を言おうとしている記事なのか、理解しづらくなっていく危険性がある。

一方、英語の記事は、一番重要な情報を一番初めに明瞭に述べ、これだけでパラグラフを独立させている。また「誰が何をしたのか」をはっきりさせ、責任の所在を明らかにしている。そして任期がいつ満了するのか、彼女の目標や責務が何であると思っているのかは、次のパラグラフで言及されている。

さらに、2期目の目標として掲げている「産業再生」「安全なまちづくり」「健康福祉社会の実現」等は日本人好みのビッグ・ワードで、これらが何を言おうとしているのか、具体的内容はつかみにくい。それに対して英語の記事では、“**revitalize local industries and support child care**”と表されており、内容が具体化されている。

次に(24)を見てみよう。(a)の日本語の記事は、「黒磯市」が「対策本部を設置し」たことと、「5032人に避難を指示した」ことの両方に同じ重きを置いていると思われる。また、「避難を指示した」のは「黒磯市」なのか、あるいは「対策本部」なのか、責任の所在が不明瞭である。一方、英語の記事(24b)を見てみると、“**ordered the evacuation**”(避難を指示した)の責任は“**Firefighters**”にあることがはっきり表されている。日本語の記事では「消防員」(“**firefighters**”)という語は一度も出て来ない。

英語の記事が(24b)から始まり、そしてこれだけでパラグラフが独立しており、次のパラグラフで現状説明等に移って行くのに対して、日本語の記事では現状説明がまずあって、次に(24a)の部分に移る。日本語の記事は、一番言いたいことは現状なのか、市が対策本部を設置したことなのか、あるいは避難勧告を出したことなのか、さらに前述のとおり、避難を指示したのは誰(どこ)なのか、解釈はいろいろと可能である。

(23) および(24) から示されるように、同じ出来事を同じ新聞という

手段を用いて報道するのに、英語と日本語とでは多々異なる点がある。2.1で取り上げた広告についても、英語と日本語とでは違いが見られる。一般的に言って、日本の広告やコマーシャルは何を宣伝しているのか分からないというものが多い。画像・映像とことば、宣伝されているものが結びつかないこともしばしばである。例(10)－(13)の英語の広告は喫煙がいかに身体に悪いかを述べていたが、それに対して日本のたばこの広告はどうであろう。

日本のたばこ広告は、商品を売るのが目的であるので、喫煙に対する注意は形式的なものに過ぎない。ポスターの隅や箱の横、すなわち目が届きにくい箇所に、「あなたの健康を損なうおそれがありますので吸いすぎに注意しましょう。喫煙マナーをまもりましょう」等とあるだけである。しかしこれでは、どのように、どの程度「健康を損なうおそれ」があるのか、「吸いすぎ」とはどの位の量なのか、具体的情報は何も提示されていない。さらに、「喫煙マナー」とは何か、解釈は人によってばらばらであろう。具体的な方向性を示さない注意を見ても、誰も次の行動には移れない。

最近生じた訴訟問題は、この日本の特徴を表している。¹⁴⁾たばこの有害性、依存性を知りながら、それを明確にせず、製造・販売を続けたことに對し、肺がん等の患者6人(うち3人は死亡)が日本たばこ産業(JT)や国などを相手に訴訟を起こした。しかし、この訴訟に対し裁判長は、まずたばこを嗜好品と位置づけ、そしてニコチンの依存性はアルコールや禁止薬物に比べ格段に低く、意思や努力で禁煙できると、また喫煙者の自由な意思決定を奪うほど強力ではないと述べた。結局、原告の敗訴である。この種の訴訟自体、日本では珍しいケースであるが、その結果がこの原告敗訴である。

さらに、1998年に既にたばこの危険性の明示を求めて提訴していたのにもかかわらず、それは未だに実現されていない。ところが、同じ商品を輸出する時には、例(10)－(13)と同様の警告を箱に記載している。他国でしている、あるいはできることを、なぜ日本ではしないのか。それは日本の文化に馴染まないからである。情報を明確に表さず、判断を受け手

の自由意志に任せる。これが日本のやり方なのである。

以上、英語と日本語を比較してきたが、その違いを一言で表すと、次のように言えるであろう。英語はことばを尽くして具体的な情報を的確に伝えようとする言語、一方、日本語はできるだけ言わずに済ませて、言おうとすることをほかし、曖昧にさせてしまう言語である。この2言語は、なぜそれぞれこのような特徴を持っているのであろうか。

3.2 発想の違いの原因

日本は世界の中でもかなりの高文脈文化を持つと言われる。故に、日本語は高文脈言語である。発話内容が発話状況、文脈に依存しており、ことばだけで自立していない。ことばからだけでは意味内容が曖昧で、発話者の意図は状況から判断しなければならない。一番重要な情報でさえ、状況に言わせてしまおうとするのが日本語である。

歴史的に農耕文化である日本は、人間関係を穏便に運ぶことを第一に考える傾向が強い。人間関係を壊さないように維持していくために、人は言いたいことははっきり言わず、曖昧に、遠回しに話をするようになる。また、「皆同じ」だから「言わなくても分かるだろう」と相手の察しを期待し、発話者はすべてを言わない。故に、聞き手は「察し」を求められ、行間を読む人が優れた人と見なされる。このような曖昧で、言わずに済まそうとする言語は、共同で責任を取ろうとする農耕文化の社会システムに向いている言語であると言えよう。

一方、基本的に狩猟文化である英語圏の文化は低文脈文化であり、英語は低文脈言語である。歴史的に見て英語は、いろいろな民族、さまざまな文化がぶつかり合った結果形成された言語であり、アメリカはもちろん、イギリスもオーストラリアも、思っているより「人種のるつぼ」と言える社会である。このようなさまざまな人種が混在する社会では、「皆違う」が前提となる。皆違っていれば、誰もが理解できるようにことばを尽くして、誤解が生じないよう、情報を的確に伝達することが必要不可欠となる。背負っている文化が異なる人々全員に情報が正確に伝わるためには、「言わないと分からない」を前提に、具体的ことばで内容を明示しなければ

ばならない。

英語圏の文化、特にアメリカにおいては、“owning”という態度が重要である。これは「自分が発するメッセージを自分の意見、感情の現れとして責任をもつ」という態度で、日本文化が解釈や判断を聞き手に任せるのとは正反対である。¹⁵⁾このような社会での人間関係の維持の仕方も、日本のやり方とは当然異なる。低文脈文化では、コミュニケーションとは「二人以上の間がシンボルを使ってお互いの間の意見、感覚、価値観などにまず違いがあることを確認して、そこから少しでも共通点、あるいは共有点とでもいうべきものを探り合う過程」であり、この考えの前提にあるのは、いくら家族や恋人同士であっても、人間は一人一人違った考えを持っているものだという考えである。¹⁶⁾故に、低文脈文化では人々は自分の意見を責任を持って表示しなければならないし、またその際、さまざまな考え、文化を持つ人々全員に的確に伝わるよう、具体的なメッセージを送る努力をしなければならない。

以上に示されるとおり、高文脈文化では人間関係を維持するために自分の言いたいこともはっきりと言わず、穏便に事を運ぼうとする。「皆同じ」だからと相手の察しを期待し、曖昧なことばで済まそうとする。一方、「皆違う」を前提とする低文脈文化での人間関係の維持の仕方は、それぞれが責任を持って自分の考えを述べ、相互に違うところから共通点を見つけていこうとするものである。健全な人間関係を築き、維持し、発展させていくために、ことばを尽くすのである。

アメリカの独立宣言等の建国文書について、先頃米紙が載せたコメントが興味深い。「米国は言葉によって、その存在を高らかに宣言した」「これらの文書がなければ、この国は存在しなかったとさえいえよう」「言葉が大事なのだ」。ことばを大切にする、いかにもアメリカらしい記事である。¹⁷⁾

4. おわりに

日本語は日本人の発想に基づいて成り立っており、英語は英語圏の人々

の発想に基づいている。「はじめに」で述べたとおり、世界の言語にはすべてそれぞれの文化、そこで生きる人々の考え方、ものの捉え方が反映されている。日本語は日本文化そのものであり、英語は英語圏の文化である。従って、言語に対して正しいとかおかしいとか間違っている等という評価はするべきではないし、してはならないものである。サピア－ウォーフの「言語相対説」である。

言語相対説がすべての言語に関わることであるとしたら、言語が変化するのもすべての言語に関わる特徴であり、また避けられない事実である。日本語も当然、さまざまな変化を受けてきた。そして最近見られる日本語の変化の現象に、また日本語の曖昧さを見出すことができる。

言語の変化は通常、内容語に起こる現象である。しかしながら、最近の日本語を見てみると、バイト用語と呼ばれるものを中心に、機能語における言語変化が起こっている。例えば、「〇〇円からお預かりします」「〇〇の方^{ほう}」「〇〇でよろしかったでしょうか」「こちら〇〇になります」等々が挙げられる。内容語を間違えて使っている「レシートをお返しします」ももちろん問題であるが、機能語の変化はまれで、それ故に深刻な問題であると言えよう。実際に使用している学生たちは、これらの表現を用い、「丁寧に、遠回しに話している」つもりであり、わかった気になっているようである。言語の変化は通常、起こるべくして起こったものであるが、しかし、これらのバイト用語については問題視するべきである。

さらに、従来から、どのような名詞にでも「的」を付けてわかったつもりになっている例をよく見かけるが、最近の「私的には」には驚くばかりである。

このような曖昧な日本語に接して思うことは、そこに映し出される文化とは、やはり曖昧な文化なのだろうということである。バイト用語等を通して見えてくるそのことばの使用者の文化は、何事も曖昧ではっきりしない文化のように思えてしまう。

日本語は日本文化の大切な一側面であり、日本文化を映し出す鏡である。日本人は文化としての言語を大切にしていかなければならない。しかし、それと同時に、我々日本人は世界共通語である英語にも目を向けなけ

ればならない。今や世界の英語人口は、約 70 ヶ国、全人口の約 30% を占め、コンピュータに取められた情報の約 8 割は英語によるものである。これだけさまざまな国の多くの人々が日常英語を用いてコミュニケーションを取る中で、日本人は何故いつまでも英語は苦手なのであろう。それは本稿で述べてきた日英語の発想の違いにも原因がある。言わずに済まず曖昧コミュニケーションに慣れ切っている人々も、ことばを尽くしてはつきりコミュニケーションを取る英語の発想に目を向け、自分たちの文化を再認識する必要があるだろう。

注

- 1) Sapir (1921)、および Crystal (1987) 参照。
- 2) Crystal (1987) 参照。
- 3) 以上の例は、Crystal (1987) より。
- 4) 人称代名詞についての考察は、鈴木 (1973)、(1998) に詳しい。
- 5) 2002 年 10 月 17 日付けの読売新聞の記事より。
- 6) 2003 年 9 月 20 日付けの朝日新聞の記事より。
- 7) 本間正人 (2002) 参照。
- 8) 2003 年 9 月 6 日付けの朝日新聞の記事より。
- 9) 2003 年 9 月 7 日付けの朝日新聞の記事より。
- 10) 1997 年 9 月 1 日の新聞記事より。
- 11) 例 (17) - (19) の出典は以下の通りである。
(17), (18) : *Newsweek, Commemorative Issue, Fall 2001.*
(19) : *The Daily Yomiuri, 9/9/2003*
- 12) 例 (20) - (22) の出典は以下の通りである。
(20) : *The Daily Yomiuri, 9/9/2003*
(21) : Goodwright and Olearski (eds.) (1998) *In the English-Speaking World.*
(22) : *Newsweek, Commemorative Issue, Fall 2001.*
- 13) 例 (23), (24) の出典は以下の通りである。
(23 a), (24 a) : 2003 年 9 月 9 日付け朝日新聞より。
(23 b), (24 b) : *The Daily Yomiuri, 9/9/2003*
- 14) 2003 年 10 月 21 日付けの朝日新聞の記事参照。
- 15) 宮原 (1992) 参照。
- 16) 宮原 (1992) 参照。
- 17) 2003 年 9 月 20 日付けの朝日新聞の記事より。

参考文献

- Crystal, David (1987) *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge University Press. (風間喜代三・長谷川欣佑監訳『言語学百科事典』大修館書店, 1992)
- 本間正人 (2002) 『英語で鍛えるロジカルシンキング!』日経 BP 社.
- 井上京子 (1998) 『もし「右」や「左」がなかったらー言語人類学への招待ー』大修館書店.
- 卷下吉夫・瀬戸賢一 (1997) 『文化と発想とレトリック』中右実編「日英語比較選書」1. 研究社出版.
- 宮原哲 (1992) 『入門コミュニケーション論』松柏社.
- Sapir, Edward (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace & World, Inc. (泉井久之助訳『言語』紀伊国屋書店, 1957)
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店.
- (1998) 『鈴木孝夫言語文化学ノート』大修館書店.

引用例出典

- Goodwright, Carol and Janet Olearski (eds.) (1998) *In the English-Speaking World*. Chancere International Publishers.
- 新聞雑誌：朝日新聞
読売新聞
The Daily Yomiuri
Newsweek, Commemorative Issue, Fall 2001.